暴力が噴出 歴史的危機

五感働かせ変化感じ取る

作家
辺見　庸さん

「瓶のふた」が開いたように、世界中で暴力が噴出している。冷戦時代の再来のようなロシアとウクライナの紛争。急速に勢力を伸ばす「イスラム国」の勃興。日本人人質殺害やフランス週刊紙銃撃に象徴される過激化するテロの恐怖。現代を「歴史的危機」ととらえる作家の辺見庸さんは、暗転の予兆をつかむためには「五感を研ぎ澄ませ」と語った。（聞き手は共同通信編集局、沢井俊光）

―戦後70年の意味をどう考えますか。

「戦間期という言葉がある。戦争と戦争の谷間にあって戦争のなかった時代という意味だが、第1次世界大戦が終わる1918年から第2次大戦が始まる39年までの約20年間を『第1次戦間期』としたら、第2次大戦が終結した45年から今までを『第2次戦間期』と言えるかどうかに興味がある。敗戦後70年たち、これから続く状態が戦争とは逆の平和かどうか、疑わしい。現代は日常の中に戦争が混入しているのではないかと思う」

―どういうことですか。

「盧溝橋事件が起きて日中戦争が始まった37年に、世の中が急速に変わる。当時の近衛内閣が国民精神総動員実施要綱を閣議決定して、挙国一致で総力戦を戦う精神的支柱を形成する。これによって日本人の生き方とか国家観が変えられていくのだが、その始まりとなった37年が戦時として意識されていたかというと、そうでもない。

たとえば国鉄（現JR）がおとぎ列車『ミッキーマウストレイン』を走らせて話題になり、プロ野球大阪タイガース（現阪神タイガース）の優勝や、連続全勝優勝で横綱に昇進した双葉山の活躍に国民が熱狂する。当時の新聞紙上からは、戦争に急速に傾いていく危うさが感じられない。

憲法解釈を変更して集団的自衛権の行使容認が閣議決定され、特定秘密保護法が施行された今、安倍政権は現状を躍起になって変えようとしているのに、それに対する恐怖感があまりにもメディアには足りないと思う」

―戦前・戦中を戦後も引きずっているのでしょうか。

「断ち切ろうとしなかった。日本と同じ枢軸国でファシストが支配していたイタリアではパルチザン（体制への抵抗運動）があったが、日本には全くなかった。敗戦後も戦中・戦前というものを色濃く滑り込ませたまま、殻だけ民主化していくという問題の根源がそこにある。

たとえば特高警察。これを廃止したのは45年10月で、日本人自らがこんなひどいものはやめようと言ったのではなく、連合国軍総司令部（GHQ）の指令だった。われわれの中に『ここまでやっていいのか』とか、『こういうことしゃべっていいのか』という内なる特高的発想がなぜ残っているかというと、自分たちが壊したのではないからだ。天皇制ファシズムという訳の分からない体制の中で『一人びとり』という発想、主体性が全部もみ殺されてしまったまま戦後70年の繁栄もあったのではないか」

―今はどんな時代でしょう。

「フランスの哲学者レジス・ドゥブレは90年代に『グローバル化で等質化すればするほど世界はバルカン化する』と言ったが、びっくりするぐらい当たっている。経済も文化もボーダーレスの時代になり、いろいろなものが均衡化していくに従って逆に、（分裂や分断が進む）バルカン化が起きるパラドキシカル（逆説的）な時代に来ていると思う。ウクライナの紛争や『イスラム国』の出現はまさにそれで、国家の衰退と封建制の復活に立ち会っているといえるのではないか。旧来の国家像が崩壊し始めている。

資本の活性化、収奪力はすさまじく、人間は人間であり得たという圏内からどんどんはじき出され、疎外されている。地球温暖化の問題を含め、これほどの巨大な不安に囲まれて生きている時代はないのではないか。ストレスが一人の人間としては耐えられないくらいのものになりつつある」

―民主主義も行き詰まっているように見えます。

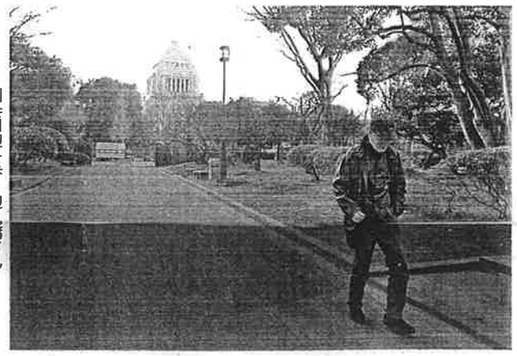
「普遍的な現象になっている。欧州のメディアは日本の右傾化を警戒しているが、ネオナチ的なものがたくさん現れる欧州自身の右傾化はすさまじい。民主主義が根付いていると思っていた米国でも、最近の黒人襲撃に見られるように差別が原始的な形で、暴力的に噴出している。民主主義というシステムの中で、問題を処理していく機能が破綻している感じさえする。

現代は歴史的な危機を経験しつつあるのではないかと思う。以前はプロレタリアートのような階級的アイデンティティーがあり、『自分たちは皆貧乏だ。許せない。政権を打倒しよう』となった。だが危機の時代においては、階級的アイデンティティーを民族的、人種的アイデンティティーが凌駕してしまう。ウクライナでもロシアでも中国でもそうだ。日本でも戦後史上、例を見ないほどの勢いで、人々の意識が嫌韓、嫌中に向かっている。

日常というのは、急にこの日から崖っぷちですという変化の仕方はしない。暗転はゆっくり、大規模にいくわけで、その過程は見ることができない。でも敏感に耳を立て、目を見開き、五感を研ぎ澄ませていれば感じることはできると思う」

へんみ・よう　44年宮城県生まれ。96年まで共同通信記者として北京、ハノイ特派員などを歴任。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、詩集「生首」で中原中也賞、「眼の海」で高見順賞を受賞。近刊に小説「霧の犬」。

転換期を語る　2015 戦後70年　3



国会周辺を歩く辺見庸さん

退路を断ち表現する覚悟

10年ほど前、病に倒れてから、体が思うように動かない。辺見庸さんはまひする半身を引きずりながら昨年12月、特定秘密保護法施行に抗議するデモに2度出かけた。

「時間の連続性はもう約束されなくなった。今のこの瞬間だけに全身全霊かけてしゃべるとか、書くとか、動くとかしかない。戦後と同じだけ、70歳まで生きてきたからには、それなりに責任がある」

退路を断って表現し、行動する。「大震災の後、辺見庸ほど胸底につきささってくる文章を書く作家を知らない」（政治学者の宮崎悠氏）と評されるのは、その覚悟ゆえだろう。

インタビューは6年ぶりだった。リーマン・ショック直後で、世界同時不況が人々の不安を増幅させていた時期だった前回から今回までの変化を、辺見さんは「めまいがするほど」と形容した。そして「今は希望はない」とはっきり言った。

前回「年越し派遣村のようなものが出てきた時、自分のことだけ考えていいのかと動揺する。そういう動揺が希望」と話していたが、動揺すらなくなってしまった今、私たちは破滅の深淵（しんえん）をのぞきこんでいるのだろうか。

次回は22日掲載予定です